

# 長野県上伊那地域における奉納煙火の現代的変容

坂本優紀\*・渡辺隼矢\*\*・山下亜紀郎\*\*\*

\*西武文理大学サービス経営学部, \*\*公益財団法人九州経済調査協会, \*\*\*筑波大学生命環境系

本稿では、長野県上伊那地域でみられる筒系噴出煙火の三国を地域文化として捉え、三国の伝播と利用形態の変容を明らかにした。伊那谷における三国は江戸時代に三河地方から伝わったとされ、各地域の神社の祭りで奉納されるようになった。現代でも駒ヶ根市以南では、主に神社の秋祭りで奉納され神事としての役割を担っている。第二次世界大戦後になると三国の利用地域が拡大し、それまで三国の北限であった駒ヶ根市より北にある宮田村と箕輪町で三国が放揚され始めた。宮田村では1962年に在来の祭礼に組み込まれる形で三国が奉納されるようになった。当初は祭礼を盛り上げることが目的であったものの、現在では神事としての意義づけがされている。一方、箕輪町では2000年代に地域イベントで放揚され始め、現在も神事としての役割はない。このように三国の拡大過程においてその意義づけは対象地域ごとに異なり、各地域それぞれの選択と解釈がなされていることが明らかとなった。

キーワード：煙火、文化、三国、神事、文化伝播、長野県上伊那地域

## I はじめに

### 1. 研究の背景と目的

日本に煙火の技術が入ってきたのは、戦国時代と伝えられている。当初は狼煙として使用されていたが、火薬技術の発展に伴い、戦争で使用されるようになっていった(泉谷, 2010)。その後、江戸時代に入ると神社の祭礼に奉納する風習が奨励され、氏子であった農民や町民に煙火の製造を担わせたことから全国的に煙火が広がったと考えられている(櫻井, 2014)。

江戸時代において煙火は奉納物としての役割を担っていたが、現代ではその役割が低下し、花火大会などのイベントの利用が主となっている。そのような状況の中、現在でも奉納物として煙火を放揚している地域の存在が認められる。その一つとして、本稿で対象とする長野県の伊那谷<sup>1)</sup>があげられる。伊那谷では現在も多くの神社で三国(さんごく)と呼ばれる筒系の噴出煙火が放揚されている。三国は特に秋祭りでの放揚が多く、伊

那谷の秋を彩る一つの要素となっている。江戸時代は、各町内あるいは各家で煙火を手作りしていたが、明治時代以降の火薬類に関する法律の制定や煙火の暴発事故などにより、煙火は主に専門業者が製造するようになった(武藤, 2001)。しかし、現在でも氏子らの煙火に対する想いは熱く、住民が花火師の資格をとって煙火製造に励む長野県阿智村清内路(坂口, 2010)や、三国の筒に火薬を充填する作業を氏子が担う地域もある。また氏子集団によって三国の色や噴出のタイミングなど細かい注文が業者に伝えられることもある。このように三国は伊那谷の祭りに欠かせないものであり<sup>2)</sup>、伊那谷の祭りを特徴づけ、地域文化<sup>3)</sup>を際立たせる一要素となっている。

このような伊那谷の三国放揚を一つの文化として捉えても、その実態は各放揚主体によって異なっている。特に近年、三国やその放揚を奉納物あるいは神事として扱わない事例も登場し、伊那谷における三国の新たな利用形態と文化の伝播がみられる。

そもそも、文化伝播に関する研究は、地理学や民俗学で主になされてきた。文化が一つの場所から他の場所に拡大・移転することで、似たような文化帯が形成されることは周知のとおりである(中川, 1995)。もちろん、文化が偶発的に多地点で発生する可能性もあり、それが伝播によるのかどうかに関しては詳細な検討も必要である。

この文化伝播に関し、特に祭りを主題としたものとして、折口信夫や早川孝太郎らが奥三河に点在する花祭りに着目し、民俗学的観点からその広がりに関する考察を示している研究がある(折口, 1930; 早川, 1930)。これらの研究では、花祭りの所作の形態や様式によって原点を探ろうとするものの、数百年続く祭りの系譜を明らかにし、起源地を同定することの難しさが読み取れる。しかし、当時の花祭りの分布をみると、拡大性伝播によるものと考えることが妥当であろうし、折口(1930)も人々の交流による伝播を指摘している。またその広がりに関しては、農村集落の形態を背景に花祭りの作法や踊りの違いが指摘されていることから(藤田, 2017)、同一文化の広がりとともに受容地の特性や文化の変容過程も含んだ考察が重要であることも示唆される。

一方、近年の祭りに関する代表的な研究としては、高知県のよさこい祭りの拡散があげられる。1954年に地域活性化を目的に始められたよさこい祭りは、1992年にYOSAKOIソーラン祭りとして札幌に伝播した(内田, 2001; 2002)。このYOSAKOIソーラン祭りをきっかけによさこい系イベントは各地に広がり、現在は国内だけではなく世界中に飛び火している(井上, 2003a; 内田, 2015)。よさこい系イベントがここまで広がった背景として、よさこいの持つグローバルとローカルのハイブリット性が指摘されている(内田, 2015)。よさこい系の踊りはローカルな音楽を取り込む一方、他系統の踊りとは異なり、踊りの形

態に縛りを設けないことで他地域での展開が可能である(井上, 2003b; 内田, 2015)。これが、よさこい系が広がった形態的特徴と考えられる。また、内田(2015)では、イベントを受容する地域のコンテキストだけではなく、祭りを主体的に実施するアクターとそれを支えるネットワークの重要性も指摘されている。このように内田の一連の研究は、現代の祭りであるよさこい系イベントの伝播・拡散過程とその要因までを明らかにしており、現代の都市における祭りは移転性の伝播傾向が強いことを示した。特に内田(2001)が指摘するように、多くの前近代的文化伝播が拡大性伝播を示す一方で、現代は諸技術<sup>4)</sup>の発達により地理的な距離が問題とならず、受容地側の積極的な取り組みによって導入が容易になっていると考えられる。

以上の研究を踏まえると、近代までの祭りの伝播は地理的制約を受けつつ人びとの交流によってもたらされてきたといえるが、現代では地理的制約が弱くなっているため、伝播するかどうかは受容地側の事情がより影響していると考えられる。

では、文化が広がっていく際に受容地ではどのような選択と解釈がなされてきたのだろうか。内田(2015)では現代の祭りの伝播に関し、受容地に既存の祭りがなかったことと、それに伴う地域イベントへの渴望が指摘されている。一方、古くから催されてきた祭りに対するこれまでの研究では、ある祭りの拡散を伝播論的に捉えてきたが、それを受け入れる地域の状況や担い手というミクロなスケールでの議論がなされてこなかった。文化が伝播していく過程では、それを取り入れる地域側の要因や状況を考慮しなければ、文化の担い手としての住民が埋没してしまい、一様に文化が広がっていくことを前提に議論が進んでしまう。文化は常に選択されていくもので、受容地の主体的な選択と解釈、変容の過程にも目を向ける必要

がある（ウィリアムズ，1983）。また，選択と解釈が繰り返されながら引き継がれていくという文化の動的側面を捉えるため，同一の祭りにおける解釈を時系列に沿って明らかにすることも文化の広がりを理解する上では重要となろう。

以上より，地域文化の動態的議論には，特定の地域における文化伝播を，受容地側の主体的な選択の結果として捉える視点とともに，その後の変容過程を担い手レベルで明らかにすることが必要となる。

そこで，本稿では伊那谷の三国放揚に焦点を当て，地域文化の伝播と変容を担い手の選択と解釈に着目しながら明らかにすることを研究目的とする。

本稿の研究方法は以下の通りである。まず，三国の概要や伊那谷における煙火の概況を明らかにするため先行研究を整理するとともに，当該地域の煙火利用の特徴と三国の詳細を煙火業者から聞き取る。次いで，煙火放揚に差異のある三地域を事例に，三国の伝播とその後の変容過程を放揚主体である氏子や任意団体への聞き取り調査から明らかにする。

## 2. 調査対象地概要

本稿では長野県上伊那地域を対象に各神社や地域イベントで放揚されている三国に着目する。上伊那地域は伊那谷の北部にあたり，伊那市，駒ヶ根市，辰野町，箕輪町，南箕輪村，宮田村，飯島町，中川村の8市町村で構成される。当地域では飯島町に1社の煙火業者が存在しており，近隣市町村で利用される煙火の製造と放揚を主に担っている。

図1は，2016年に上伊那地域で放揚された煙火の分布である。これをみると，2016年の全煙火放揚地点数<sup>5)</sup>は307におよび，そのうち三国の放揚は14地点である。三国の始まりは伊那谷の南

部と推察されるため（櫻井，2014），その分布も南側に偏っている。三国を放揚した14地点は表1の通りである。これをみると12地点が9月か10月に実施される神社の秋祭りでの放揚であり，打ち揚げ地点は太田切川以南となっている。煙火業者への聞き取りによると，以前は太田切川以南の多くの集落が三国を放揚していたが，過疎化等により放揚を取りやめる事例もみられるとのことである。

本稿ではこれら三国の放揚のうち，北限に位置する3地点を事例としてとり挙げる。具体的には，太田切川以南においてもっとも北側で放揚している駒ヶ根市の大宮五十鈴神社例大祭，その北部に位置する宮田村の宮田祇園祭，そして伊那谷においてもっとも北部で放揚している箕輪町のみのお祭りである。その理由として，これらの地域は三国の盛んな伊那谷の北縁部にあたり（図2），文化としての三国の伝播の仕方と利用形態が特徴的であるためである。また，太田切川以南の三国に関してはその起源が古いため，放揚の開始時期や祭りへの編入過程が不確かなものが多いが，宮田祇園祭とみのお祭りは近年三国を取り入れた地域のため，本稿の目的を検討するのに適した事例である。

## II 三国の概要

三国は，伊那谷において主に奉納煙火として用いられる筒系噴出煙火の一種である。地域ごとに「三国」または「三国一」と呼称されるが，基本的に同じものを指す。三国の名称の由来としては，伊那谷に煙火技術を伝えた武田信玄が甲斐，信濃，駿河の三国を支配したためという説や，当時の日本人の世界観の中心である日本，中国，天竺（インド）の三国に誇れるものであるからという説が代表的であるものの，定かではない（わたしたちのお宮大宮五十鈴神社編集委員会編，

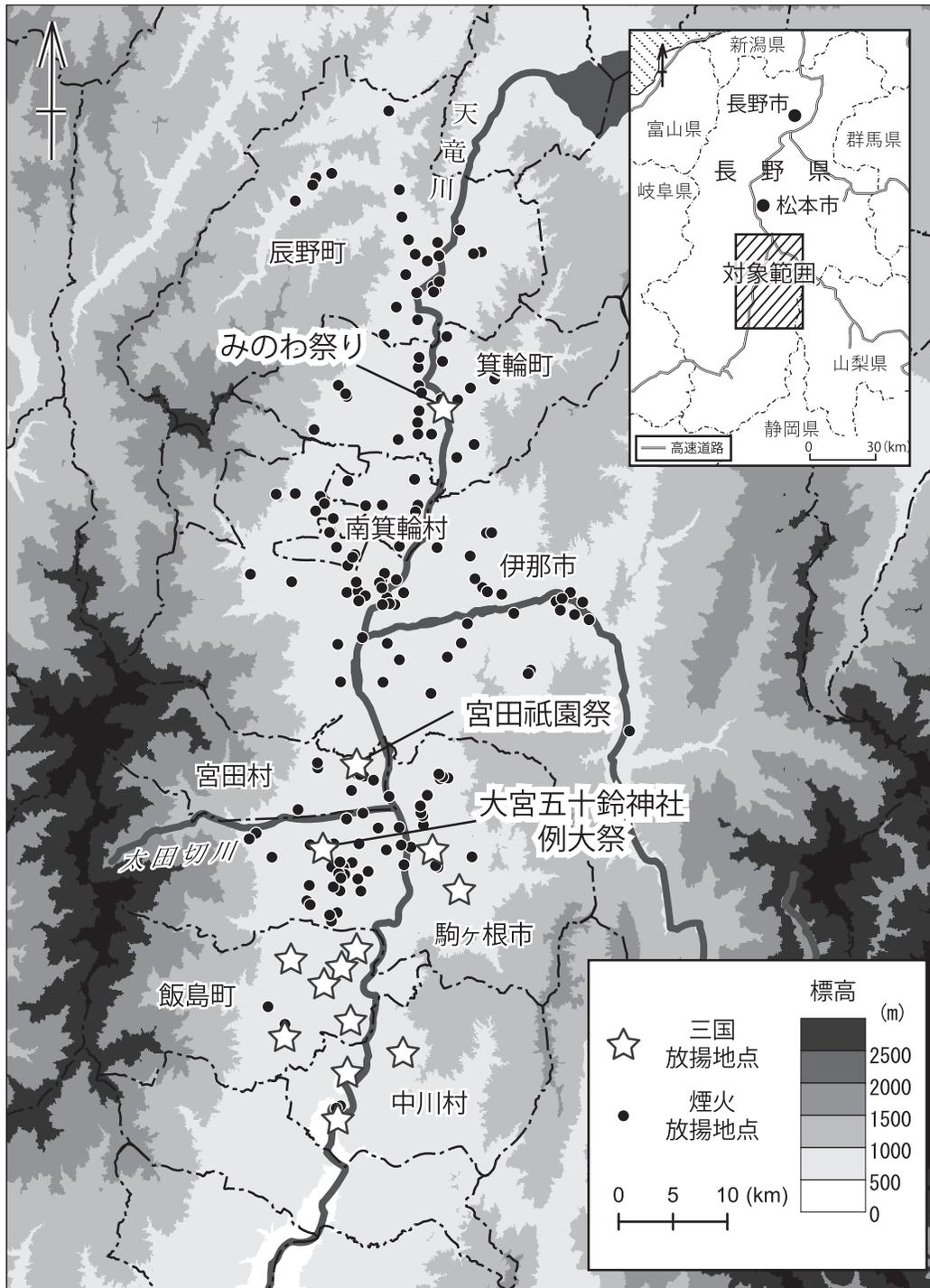


図1 上伊那地域の煙火放揚地点 (2016年)

(煙火打ち上げ・仕掛け届出書より作成)

表1 三国を放揚した祭り（2016年）

放揚日	目的	放揚数
7/16	宮田祇園祭祭典	2
7/30	みのわ祭り	1
9/17	梅戸神社秋の例祭奉納煙火	1
9/22	大宮五十鈴神社祭典奉納煙火	20
9/22	諏訪神社秋季例祭奉納煙火	1
9/24	日方磐神社秋季祭典奉納煙火	4
9/24	石上神社秋季祭典奉納煙火	1
10/1	香花社奉納下割自治組合秋祭り	1
10/1	中沢区中割自治組合秋祭り	2
10/1	本郷神社秋季祭典奉納煙火	2
10/1	八幡神社秋季祭典	1
10/1	七久保三社合同祭奉納煙火	1
10/1	太平社秋季祭典	1
10/2	葛北秋祭り	1

（煙火打ち上げ・仕掛け届出書より作成）

1998)。

三国は地域によってその大きさが異なっているものの、現在の標準的なものは直径がおおよそ10cm、高さがおおよそ120cmから150cmの筒に火薬を詰める（図3）。従来、素材としては竹筒が広く用いられていたが、後に安全性の観点や材料の入手の容易さから紙製への転換が進んだ。また伊那谷中部や飯田市の一部では筒の素材として伝統的に木筒が用いられてきた。これらの地区では現在でも紙筒を木筒に入れて三国を奉納するものもみられる。また伊那谷南部の阿智村清内路では現在でも竹筒が用いられており、1992年には県の無形文化財に登録された。使用する火薬の量は煙火業者に発注する場合、一貫目（3.75kg）から三貫目（11.25kg）が標準であり、それぞれの祭りで使用する筒の大きさや噴出時間等により異なる。

三国の放揚は、あらかじめ柱または櫓に固定された筒に、綱火と呼ばれる仕掛け花火が導火線のように火を伝えることから始まる。これにより三国に着火し、火薬量等により差はあるものの、最大で高さ10mの火柱が3～9分間噴出される。こ

の噴出には強弱があり、この強弱を一幕として大きく三または四幕から吹き出し演出は構成されている。この幕にはそれぞれ名称があり、櫻井（2014）によると松風、藤、紅葉、白根となる。これらは伊那谷の四季を表しており、それぞれの幕により噴出の表現（煙火の色や噴出量等）や使用される火薬の種類が異なる。また、この吹き出し演出は「ハネ」と呼ばれる破裂によって締められる地域が多い。

次に、櫻井（2014）をもとに伊那谷における奉納煙火の歴史を詳述する。もっとも古い煙火の記録は、1712年に飯田市の今宮郊戸神社で奉納されたものである。飯島町の日方磐神社では1655年に煙火をはじめたという言い伝えがあるが、確実な記録ではない。これらの煙火はいずれも筒系煙火と推測されている。これより煙火奉納の風習は、江戸中期から後期にかけて飯田を中心に伊那谷一帯に伝播したとみられる。昭和期に入ると、戦時中の資材等の不足や終戦後のGHQによる煙火製造禁止令等による後退期はあったものの、1948年の禁止令解除に伴い再興した。しかし近年は、過疎化による氏子や出資者の減少により、一部の神社においては三国の規模縮小や煙火奉納の中止がみられている。2016年現在の伊那谷における三国放揚地点をみると、飯田市をはじめとした伊那谷南部を中心に広がっていることがわかる（図2）。他方、伊那市や諏訪地域において三国の放揚はみられない。駒ヶ根市誌編集委員会（2007）は、伊那谷において太田切川を境に言語や文化の差異がみられることを指摘しているが、三国の放揚という観点においてもおおむね同様であると考えられる。なお2018年現在、太田切川以北で三国放揚がみられるのは、本稿が事例とする宮田村の津島神社で催行される宮田祇園祭、および箕輪町のみのわ祭りの2事例のみである。

伊那谷の三国を中心とする煙火奉納の特徴とし

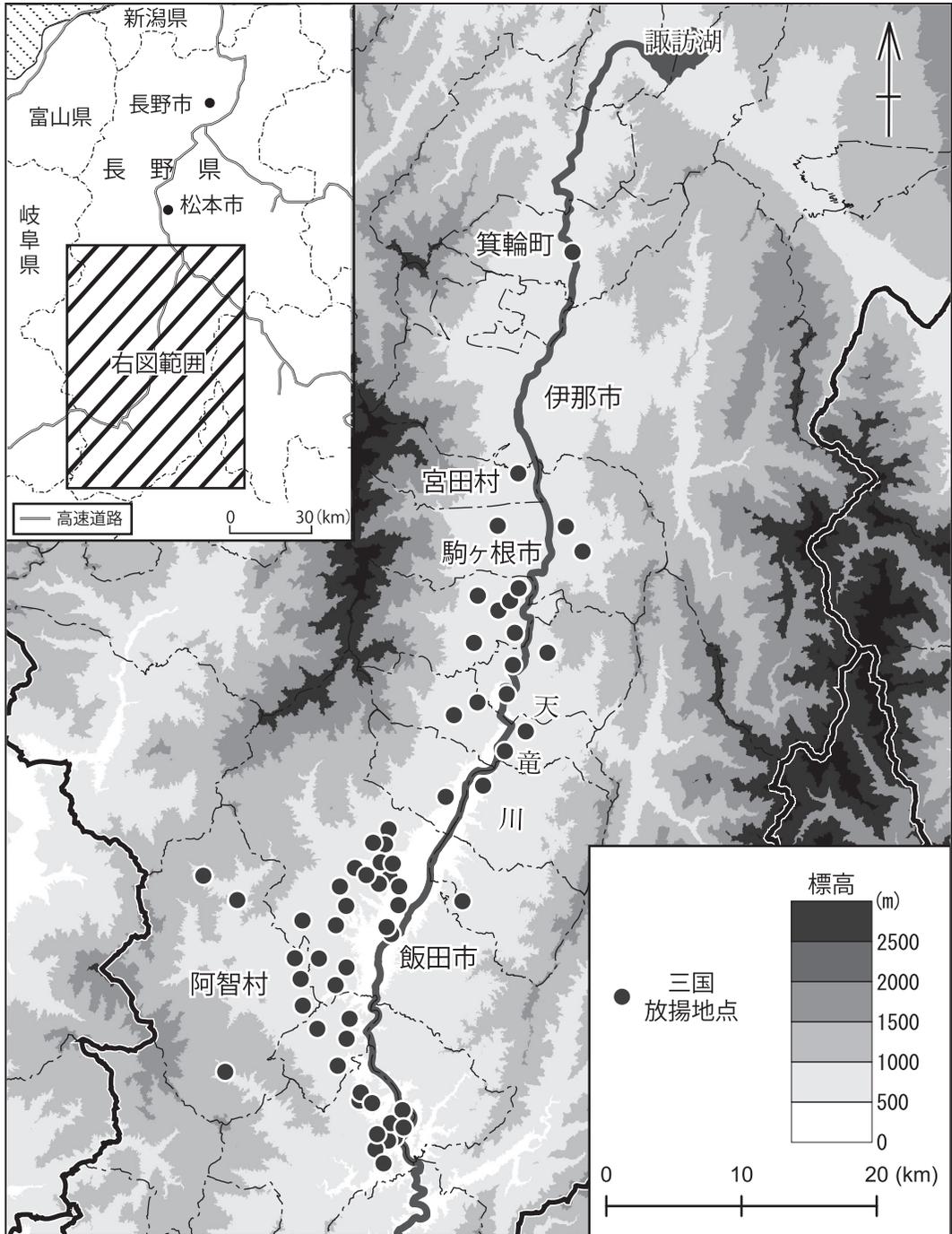


図2 伊那谷における三国放揚地点 (2016年)

(煙火打ち上げ・仕掛け届出書より作成)

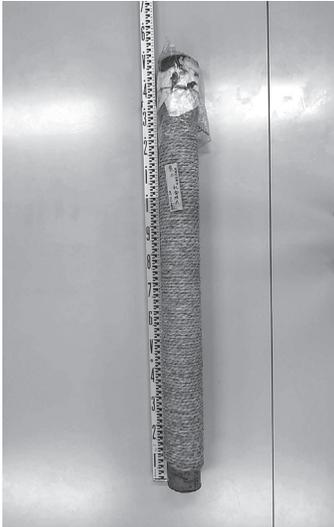


図3 三国

箕輪町で使用された三国。紙管に荒縄が巻き付けてある。長さは150cm。  
(2019年7月坂本撮影)



図4 火薬詰め作業

大宮五十鈴神社の氏子が煙火店従業員指導のもと火薬を詰める。2/3程度が埋まった三国に少量の火薬を入れ、槌と木棒で隙間がないように固く詰める。祭り当日の早朝から数時間この作業を行う。

(2017年9月坂本撮影)

て以下の点が挙げられる。まずは氏子による火薬の手詰めである。三国が普及した江戸・明治初期は住民が自らの手で煙火を製造し、奉納していた。1910年の銃砲火薬取締法改正により火薬の使用が徐々に規制され煙火製造の専門化が進行したが、現在も祭典当日に煙火業者の管理のもと、氏子自らの手で火薬の手詰めを行う地域がある(図4)。しかし、火薬詰め作業には多大な労力を要するため、その地域数は減少している。現在は氏子の代わりに煙火業者が各氏子の要望のもとに火薬を調合し、筒詰めまでを行うことが慣例である。

この他の特徴としては、競い(きおい)と火浴びが挙げられる。競いとは、煙火奉納前に行う練り歩きで、三国(またはその模擬筒)のほか、玉箱、筒払いなどの煙火関連の道具、神輿、そして煙火奉納を担当した地区を示す提灯などを持った行列が地区内を練り歩き神社に向かう(中崎, 2016)。地区によっては、煙火が取り付けられた

神輿が競いに含まれる場合もある。また、火浴びとは、煙火放揚の際にこれら行列の一部が煙火の下に入り、火の粉を浴びることである。これにより、氏子の穢れが払われたり、無病息災などのご利益が享受できたりすると伝えられている。このように、三国奉納や放揚は祭礼の中において神事としての重要な役割を担っている。

ただし、先述の筒素材以外にも三国放揚に関する地域差は数多く存在する。例えば飯田市を中心とした下伊那地域においては、三国の柱への固定、真上方向への噴出が多くみられるのに対し、駒ヶ根市などの上伊那地域においては、三国の槽への固定、斜め方向への噴出が中心である。また、同地域内においても煙火や競いの演出、囲いの有無やその様式など、各神社による差異が非常に大きい(櫻井, 2014)。

三国は煙火の一種であるため、その取扱いには

免許が必要となる場合がある。煙火放揚には、火薬類取締法で定められた保安距離内に人や物が入ることができない。三国の場合、およそ10m以内の立ち入りが制限されている。この保安距離内に入るためには、煙火業者の発行する煙火打揚従事者手帳（以下、手帳）の保有が必要である。手帳は、各煙火業者が実施する講習会に参加することで取得できる。氏子の中には、保安距離内に入り火の粉を浴びるため、手帳を保有する者もある。

### Ⅲ 上伊那地域北部の三国利用

#### 1. 駒ヶ根市大宮五十鈴神社の伝統的三国利用

駒ヶ根市の大宮五十鈴神社は、JR駒ヶ根駅から西に約1キロの位置に鎮座し、主に駅前の中心商店街などに多くの氏子を有している。神社の創建について駒ヶ根市誌編纂委員会（1974）によると、308年（応神天皇39年）に熱田神宮より熱田大神を分祠し、また311年（応神天皇42年）に伊勢神宮より天照皇大神、諏訪大社より建御名方命を分祠し、これらを相殿としたことが由来とされている。当時は「伊鈴神社」と称していたが、1908年から1909年にかけて周辺8社を合祀し、現在の名称となった。

大宮五十鈴神社の例大祭は毎年9月下旬に行われており、秋分の日に宵祭、その翌日に本祭を実施している。この宵祭のフィナーレとして三国の奉納、および放揚が催されている。

大宮五十鈴神社における三国奉納の記録は1908年より残っており、その特徴として氏子自らが切り出した木筒を利用すること、放揚用に櫓を設置し、そこから煙火を斜めに噴出すること、そして「初三国一」「大三国一」と2回に分けて放揚することが挙げられる（わたしたちのお宮大宮五十鈴神社編集委員会編、1998）。

以下、大宮五十鈴神社における例大祭と三国奉

納の流れを中崎（2016）および聞き取り調査<sup>6)</sup>に基づき示す。まず9月初旬に三国の木筒として使用する御神木の伐採式を、宮司の立会いのもと実施する。木筒にはアカマツが利用され、木遣り隊と呼ばれる氏子代表が初三国一用と大三国一用の2本の神木を切り出す。三国に使用する木筒の切り出しを神事として実施するのは、伊那谷では大宮五十鈴神社だけであり、この伐採式は30年ほど前から始まった比較的新しい形態である。この切り出されたアカマツを、例大祭前日までに整形し当日に備える。三国の筒は長さがおよそ2m、重さがおよそ250kgと伊那谷の中でも大きいサイズである。

例大祭当日は、午前中から獅子を中心とした町内練り歩き、境内での奉納弓道大会といった祭事が行われる傍ら、飯島町の煙火店敷地内にて氏子による火薬詰め作業が行われる。火薬詰め作業は早朝5時から始まり、およそ4時間かけて24kgの火薬が詰められる。火薬詰め作業の完了後、三国を積載したトラックが町内を巡回した後、放揚する神社境内に設営される。夕方になると獅子舞などの練り歩きが神社境内に到着し、獅子頭の奉納や浦安の舞などの神事が境内にて行われる。これらの神事が終わると三国の奉納が始まる。まず、三国の模擬筒や玉箱、筒払いなどを持った総勢約200人による「競い」と呼ばれる行列が境内に入り、三国の準備が整ったことを示す。ここで神前と呼ばれる筒型煙火への点火が始まり、焼字、ナイアガラといった仕掛け花火、小三国などを放揚した後、初三国一の放揚が行われる。櫓に固定された三国からは約10mの火花が斜め方向に噴出し、その下ではファンファーレが鳴る中「ワッショイ」の掛け声のもと御幣や纏、火薬箱などを持った氏子が下に入り火の粉を浴びる（図5）。その後、先程と全く同じ流れで競いから神前、仕掛け花火、小三国、そして大三国一の放揚を行い、



図5 大宮五十鈴神社の三国放揚  
槽に固定された三国から勢いよく火花が  
噴き出す。

(2017年9月坂本撮影)

再度氏子が火の粉を浴びて祭典は締められる。

聞き取りによると<sup>7)</sup>、煙火放揚の運営は大宮五十鈴神社の氏子が全て担っている。現在、大宮五十鈴神社の氏子は、耕地と呼ばれる地区に属しており、これらの耕地がそれぞれ3年おきに例大祭の祭典委員を務める。この祭典委員会のうち、煙火部が煙火に関する業務全般を担当している。また、煙火店に要望する火薬の種類など、煙火のスタイルに関して耕地ごとに違いが存在し、加えて耕地間で競い合うようにして三国を發展させていったとのことである。特に、煙火業者に火薬の製造を委託する以前は、その時の煙火担当者によって火薬の配合が決められていた。しかし、火薬の製造を煙火業者に委託するようになったことで、氏子が火薬を扱う機会がなくなり、火薬に対する知識が途絶えた。

以上のことから勘案すると、現在は委託を始めた当時の配合を各耕地が引き継いでいると考えられる。しかし、これらの差異を生み出した要因に

関する記録が存在しないため、氏子らが三国を変化させていく過程を具に比較検討することは本事例では難しい。

このようにして伝承、そして更新されてきた「大宮五十鈴神社の三国一」は、2017年7月に駒ヶ根市の無形民俗文化財に登録された。その過程で、三国は住民にとって貴重な文化財という認識が強くあったことが確認された。今後とも氏は伝統の継承、そして地域のPRとして三国を利用していく方針であることがわかった。

## 2. 宮田村宮田祇園祭の三国利用の変遷

宮田村の三国は、毎年7月第3土曜日に開催される宮田祇園祭（以下、祇園祭）で放揚される。祇園祭は村内に鎮座する津島神社の祭礼であり、1840年には盛大に催された記録が残っている（宮田村誌編纂委員会、1983：545）。津島神社は宮田駅の東側に位置しており、駅周辺の市街地一帯が神社の氏子町である。氏子町は三つに分けられ、それぞれの町から祭典委員と呼ばれる役員が選出され祇園祭が執り行われる。

宮田村の祇園祭は「天下の奇祭」あるいは「あばれ神輿」と呼ばれており<sup>8)</sup>、祭礼の中での神事にその特徴がある。あばれ神輿と呼ばれる所以は、氏子町内を回った神輿が神社に戻ってくると、神輿の中心を通っている真柱一本になるまで境内手前の階段の上から投げ落とすことにある。神輿の破片には、無病息災の厄除けや商売繁盛など、様々なご利益があるとされている（天野、1998）。

聞き取りによると<sup>9)</sup>、宮田村における三国は祇園祭のクライマックスとして放揚される。神輿が階段から投げ落とされ真柱のみが残った時点で、仕掛け煙火や三国の放揚に入る。三国が火の粉を吹き始めると、祭典委員長を始めとする代表者が真柱を持ち三国の近くを歩く（図6）。これら火

の粉を浴びる祭典委員は、手帳持ちとして事前に煙火業者の講習を受けている。

祇園祭の三国は、氏子が神社に奉納する形態ではなく、村の商工会が会員から寄附を募り提供している<sup>10)</sup>。2016年まで三国の製造はそのすべてを飯島町の煙火業者に委託していたが、2017年には祇園祭の前日に氏子が煙火工場で火薬を詰める作業を行った。これは煙火業者が親しい氏子に提案したことで実現し、氏子側も「自らの祭礼の一要素」とするために受け入れた。祇園祭で放揚される三国の大きさは120cm、太さ9cm、火薬量が1.7貫目(6.7kg)の紙管製のものである。その年の状況により、1本から3本の三国が放揚されるが、直近10年は2本が放揚されている。

また、現存する商工会資料や聞き取り調査<sup>11)</sup>に基づき宮田村の三国の歴史的経緯をまとめると、最初に祇園祭で三国が放揚されたのは1962年であったことが明らかとなった。三国が祇園祭に導入された経緯は以下の通りである。1962年に商工会事務局長が、祇園祭を盛り上げるために、煙火を祭礼の最後で放揚することを提案した。福島県出身であった事務局長は、駒ヶ根市以南で放揚される三国に興味を示しており、祇園祭で放揚す



図6 宮田祇園祭の三国放揚

三国の火花の近くを氏子が神輿の真柱を持ちながら歩く。  
(宮田村商工会提供)

る煙火の中にも三国を入れることを決めた。その際に三国の名目は奉納煙火とし、伊那谷全般で放揚されている三国と同様の形態をとった。この年の煙火放揚は急遽決められたため、煙火の費用には事務局長の私費が投じられた。翌1963年の祇園祭での煙火放揚には、商工会の会員から寄附を受けたことを示す総会資料があることから、これ以降は寄附制となったと考えられる。

宮田村における三国放揚は、以上のような経緯で始まったため、現在でも祇園祭自体は氏子が執り行うが、三国は商工会が中心となって放揚することになっている。しかし、氏子らは三国の火の粉の中で競ったり、火薬詰め作業を行ったりと、祇園祭の中の一つの神事として扱っていることには注意を向ける必要がある。

そこで、津島神社の氏子の中でも古参である氏子Aの意識をもとに、氏子と三国の関わりをみてみたい。氏子Aによると、1966年当時から三国は放揚されており、いつから祇園祭で三国が放揚されるようになったのかは知らず、むしろ、古くから祇園祭の一部として放揚されているものとして認識していた。また、氏子が真柱とともに火の粉を浴びることで神輿の穢れを払うとも述べている。すなわち、商工会主体とはいえ氏子にとっては当時から神事の一つとして認識されていたと考えられよう。これは、商工会がイベント的な役割で導入した三国であるものの、住民は後から神事としての意味を付与することで自らの祭りに組み込んでいったといえる。

### 3. 箕輪町みのわ祭りにおける新たな三国利用

みのわ祭りは、長野県箕輪町において毎年7月の最終土曜日に開催される地域のイベントである。町内の個人や団体から構成される実行委員会が主体となり、2017年で29回目の開催となった。みのわ祭りでは日中から地域住民によるステージ

ショーや練り神輿などが行われ、多くの町民が参加する。この祭典の夜のイベントとして花火大会が例年実施されている。この花火大会は2部構成であり、前半の部では、煙火業者によるミュージックスターマインの演出が行われる。そして後半の部は、手筒煙火、打揚煙火、そして三国を中心とした伊那谷伝統煙火からなる、煙火のパフォーマンスが行われる。

聞き取りによると<sup>12)</sup>、この煙火パフォーマンスの中心は手筒煙火である。手筒煙火とは筒形の噴き出し煙火の一種で、文字通り筒を手を持った状態で放揚する煙火である。現在は愛知県東三河地方などをはじめとした一部地域にてその放揚がみられる。みのわ祭りにおいては、全長約20cmの小型タイプと、全長約1mの大型タイプの2種類の手筒煙火を使用しており、特に小型の手筒煙火を複数人で同時に放揚する演舞が、この煙火パフォーマンスの目玉となっている。またその一環として、三国や仕掛け花火等の伊那谷伝統の煙火の放揚も実施している。ここで用いられる三国は紙製の三段式で、鉄パイプの足場に固定し放揚する。パフォーマンスの長さにより三国の大きさが異なる。使用頻度の高い三国は、長さが150cm、火薬量11.25kgで垂直方向に約10m噴出する。これらの煙火パフォーマンスは、飯田市に存在する煙火業者の協力のもと、商工会青年部を中心に結成された任意団体の「みのわ手筒会（以下、手筒会）」が中心となり実施されている。

以下、手筒会における三国の利用形態について聞き取り調査<sup>13)</sup>を基に詳述する。同会の発足の経緯は2001年に遡る。2001年11月に、箕輪町商工会青年部が翌年のみのわ祭りにおける前夜祭の企画運営を担当することになった。その企画内容を検討する中で、長野県全域にてみられる煙火の放揚が箕輪町には存在しなかったことから、煙火の放揚を前夜祭にて実施する方針となった。一方

で、打揚煙火では諏訪地域や北信地域、固定する形の筒形煙火では伊那谷地域における先行事例との競合が予想されたため、県内ではみられなかった手筒煙火を導入することに決定した。またこの決定には、飯田市に存在するS煙火業者の当時の社長と手筒会代表のK氏が旧来より懇意であったことも要因として大きい。

手筒煙火を始めるにあたり、煙火とそれに関連する法律やリスクマネジメントを手筒会として学習することになった。これには商工会の後継経営者育成という意味もあり、結果として商工会青年部の部員が中心となり12名で活動を開始した。手筒会は、飯田市の煙火業者や阿智村の上清内路煙火同志会、岐阜県恵那市の手筒煙火放揚団体から、煙火に関する知識を取り入れた。その後警察や消防、長野県地方事務所との折衝を通して長野県における手筒煙火放揚に関する規定を作成し、2002年5月の煙火放揚の予行、同年7月の本祭での実施にこぎつけた。なお、みのわ手筒会はこの2002年5月の予行の際に、組織として正式に発足した。

現在、手筒会の会員は42名である。その多くは箕輪町商工会青年部や青年部出身者であるものの、町外居住者も6名含まれている。2002年に生坂村役場から依頼を受けたことを契機に、みのわ祭り以外でのパフォーマンスも行っており、現在では年間7から8回程度、町外のイベントにも参加している。

手筒会の活動のうち、三国放揚をはじめとする伊那谷伝統煙火のパフォーマンスは、煙火業者や上清内路煙火同志会などの協力のもと2004年より開始された。三国の導入は手筒煙火の幕間劇として時間を確保するためという理由もあるが、伊那谷に伝わる奉納煙火の文化を告知するためでもある。そのため三国のほか、火車や仕掛け花火、ナイアガラなどの放揚が行われ、またそれぞれの

放揚の都度、場内アナウンスによる煙火の解説がなされる。三国放揚の際は、手筒煙火放揚の際と同様に、観客は保安距離外から見物する。

手筒会の三国では火浴びや競い等の神事的要素は全く行われないことから、イベント的利用として捉えられる。

#### IV 三国の現代的伝播とその利用形態

前章でみた3地域での三国をまとめると表2となる。また、その伝播と変容の過程を模式的に示すと図7となる。それぞれの地域で開始年が異なり、宮田祇園祭とみのわ祭りに関しては、文化伝播の経緯が明らかとなった。また、それぞれ異なった担い手によって放揚されているため、三国の役割や意義づけに差異がみられた。

大宮五十鈴神社の事例では、伊那谷における三

国の伝統的利用形態である神事としての役割を有し、氏子主体で放揚している。これは伊那谷一体に広く分布し、特に飯田市を中心とする下伊那地域においてよくみられる。本稿で対象とした駒ヶ根市の大宮五十鈴神社は、氏子が神事として三国を放揚する北端といえる。ただし、三国に使用する材料、火薬の配合、点火方法など各地域や氏子によって異なる点がある。これは伝播した時期やその地域ごとの状況が三国の利用形態に反映されているためと考えられる。

次いで、みのわ祭りの事例では、現代的なイベントの一環として三国を取り入れたため、伝統的に継承している地域での役割とは異なる目的で放揚している点が特徴としてあげられる。例えば、三国をパフォーマンスの一種として導入したため、放揚時にBGMをつけ効果的に演出している

表2 三国の特徴と担い手の比較

祭り名称	開始年	担い手	素材	高さ (cm)	火薬量 (kg)	始めた動機
大宮五十鈴神社	江戸時代	氏子	木材	200	24	不明
宮田祇園祭	1962年	商工会・氏子	紙管	120	7.5	祭りを盛り上げるため
みのわ祭り	2004年	任意団体	紙管	150	11.25	パフォーマンスの一環

高さ、火薬量は最も大きい三国のものを記載。

(聞き取り調査と氏子・団体資料より作成)

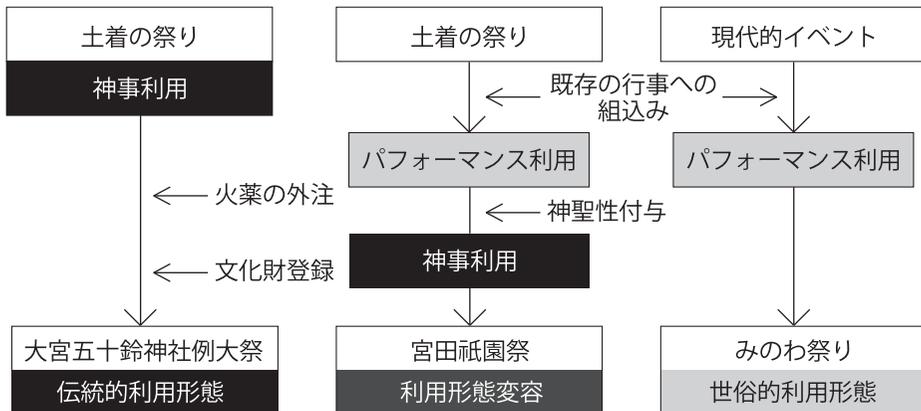


図7 三国の伝播と変容

点である。しかし単なるパフォーマンスでの導入ではなく、伊那谷に伝わる伝統煙火の紹介を目的にしていることもあり、放揚時に三国の説明を行うなど、伝統的な地域文化の周知に役立っているとも考えられる。

一方、宮田祇園祭の事例では、時間の経過とともに導入当初のパフォーマンス的要素から神事的要素へと住民の中での意義付けが変化していった。その結果、現在ではパフォーマンスとしての役割は乏しく、大宮五十鈴神社と類似した伝統的形態へと変化した。その過程においては、住民の中での意義付けが大きく変化しており、その時々合う選択と解釈がなされながら三国が利用されていったと考えられる。特に、神事としての意義付けがなされていることから、祭りの神聖性や伝統性を高めるための解釈がなされたと読み取れる。

また、本稿で扱った3つの事例を地図上で捉えてみると、三国が盛んな地域の縁辺部に、戦後新たに取り入れられた宮田村と箕輪町の事例がある。伊那谷においては古くから駒ヶ根市の太田切川を境に文化の差異が指摘されてきた。三国においても太田切川以南において伝統的な三国の文化圏が形成されているものの、その北側では戦前期まで三国の利用がないことから同様の傾向が指摘できる。しかし、戦後になると太田切川より北側に位置する宮田村で祇園祭に三国が取り入れられた。さらに2000年代に入ると、より北側にある箕輪町の団体によって地域のイベントのパフォーマンスとして三国が放揚され始めた。これは江戸時代より伊那谷に伝わる三国が、現代に入り新たな地域に伝播したものといえるが、その伝播に関しては宮田村が拡大性伝播であったのに対し、箕輪町は拡大性かつ移転性伝播の傾向が強い。箕輪町の場合、南信の文化として煙火を取り込もうとした一方、その技術に関しては阿智村清内路や県

外から導入されている。これは、箕輪町の煙火がパフォーマンス目的であることから、周辺の地域との差別化を図る必要があったためと考えられる。そして、その利用形態は各地域の状況に合わせた現代的なものになっている。言い換えるならば、他地域での文化を自地域に取り入れながら既存の文化と融合していくことで、自らの文化の更新を図る作業を行っているのである。そして三国においては、伝播していく距離が遠くなることで元来有していた神事としての役割から離れ、より世俗的な利用となっていることが指摘できる。また宮田村の事例は、三国を地域の伝統的な祭礼に後から取り込むことで、その神事としての意味づけをさらに強化させていったものと解釈できる。

## V おわりに

本稿は地域文化としての三国に関し、担い手の選択と解釈に着目して、その伝播と変容を明らかにした。

本稿で扱った3事例は、文化としての三国が伝播しそれが継承されていく中で、担い手によって選択と解釈がなされ、それぞれの地域文化が形成されていく過程を示すものであった。本稿は、文化が広がっていく過程において、担い手によってその意味付けや役割が選択・解釈され、在来的な文化と融合することで変容しながら定着する過程を明らかにした。同時に、定着した地域における文化の継承過程では、担い手によってその時々状況に合うよう選択と解釈がなされる様子を示した。

文化をめぐる現代的な文脈においては、人の往来が激しい時代のため、外部者の視線を意識する必要がある。事実、大宮五十鈴神社では文化財登録や市の観光パンフレット掲載等を通して、氏子の主体者意識が高まった様子がうかがえた。しかし他方、宮田村の事例のように地域内に向けた視

線で文化の変容を捉える必要もある。これら外部の視線と内部の視線の双方によって、選択・解釈されていくことが地域文化の現代の特徴といえよう。

### [付記]

本稿の作成にあたり、大宮五十鈴神社の白鳥俊明宮司や氏子の方々、宮田村商工会の松澤敏郎様、津島神社の氏子の方々、みのわ手筒会の唐澤修一様、飯田市美術博物館学芸員櫻井弘人様には貴重なお話を聞かせていただきました。また、伊那火工堀内煙火店社長的那須野 大様には、三国の作成過程から放揚現場までご案内いただきました。下伊那地域の煙火に関しては筑波大学大学院生の篠原弘樹様にデータの整理を手伝っていただきました。末筆になりますがお礼申し上げます。

なお本研究には、2017年度筑波大学山岳科学センター機能強化推進費（調査研究費）「山岳地域に関するツーリズム研究の課題構築」（代表者：呉羽正昭）と2018年度愛知大学三遠南信地域連携研究センター一般共同研究（自由研究）「三遠南信地域の煙火文化に関する研究」の一部を使用した。本稿の骨子は2018年日本地理学会春季学術大会（2018年3月、東京学芸大学）にて発表した。

### 注

- 1) 本稿では、長野県の南信地方の中でも天竜川が流下する地域を伊那谷とする。具体的には、上伊那地域と飯伊地域を合わせた地域である。
- 2) もちろん伊那谷の全ての祭りにおいて三国が放揚されているわけではない。しかし、煙火の一部は県や市の無形民俗文化財に登録され、地域の伝統文化として重要視されている。
- 3) なお、本稿ではウィリアムズ（1983）の文化の定義を参考にし、地域文化を特定の地域で特徴的にみられる生活に関連した様式とする。
- 4) 例えば、情報技術の発達により踊りや音楽の複製が容易になされたり、他地域の祭りを知る機会が増加している。
- 5) 神事やイベントで利用される打揚煙火だけでなく、地域の運動会や祭りなどの合図として利用される音だけの煙火を含む。
- 6) 2017年10月25日に、大宮五十鈴神社宮司と氏子4名、駒ヶ根市役所職員から聞き取りを行った。

- 7) 前掲6)。
- 8) 宮田村ホームページ<http://kankou.vill.miyada.nagano.jp/>（最終閲覧日：2018年3月1日）による。
- 9) 2017年10月23日に宮田村商工会、10月28日に氏子1名から聞き取りを行った。
- 10) 祇園祭では、三国の他にも打揚煙火も実施されており、商工会は三国を含めたすべての煙火を提供する。煙火の経費は、会員による寄附でまかなわれているため、煙火番付を作成し寄附のあった会員名を公表している。
- 11) 前掲9)。
- 12) 2017年10月27日にみのわ手筒会代表者から聞き取りを行った。
- 13) 前掲12)。

### 文 献

- 天野早人（1998）：津島神社。伊那路，42(5)，187-195。  
 泉谷玄作（2010）：『日本の花火はなぜ世界一なのか？』講談社+α新書。  
 井上 昇（2003a）：広がる高地の「よさこい祭り」（前編）－創設期から現在まで。地理，48(7)，40-47。  
 井上 昇（2003b）：広がる高地の「よさこい祭り」（後編）－地域を超えたよさこい。地理，48(9)，104-109。  
 ウィリアムズ，R. 著，和槇子繁信・妹尾剛光・長谷川光昭訳（1983）：『長い革命』ミネルヴァ書房。  
 Williams, R. 1961. *The Long Revolution*, London, Chatto and Windus. Pelican Books.  
 内田忠賢（2001）：都市の伝統と現代－よさこい祭りの伝播（前編）－。地理，46(12)，90-95。  
 内田忠賢（2002）：都市の伝統と現代－よさこい祭りの伝播（後編）－。地理，47(1)，76-81。  
 内田忠賢（2015）：現代祝祭のグローバルな展開－YOSAKOI-SORAN ブラジル大会－。奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告，8，121-128。  
 折口信夫（1930）：山の霜月舞－花祭り解説－。民俗藝術，3，373-421。  
 駒ヶ根市誌編纂委員（1974）：『駒ヶ根市誌現代編下巻』325-326，駒ヶ根市誌刊行会。  
 駒ヶ根市誌編纂委員会（2007）：『駒ヶ根市誌自然編Ⅱ「駒ヶ根市の自然」』110-111，駒ヶ根市教育委員会・駒ヶ根市立博物館。  
 坂口香代子（2010）：あかりと文化 花火師たちの里－清内路の手作り花火（長野県）夏の終わり，山深い峠の里で「花火師」となる住民たち。中部圏研究，171，83-101。  
 櫻井弘人（2014）：南信州の煙火－その歴史と特徴－。飯田市美術博物館編集：『南信州の煙火－火の芸術に

- 魅せられた男たち-』54-72, 飯田市美術博物館.
- 中川 正 (1995): 文化伝播, 高橋伸夫・田林 明・小野寺 淳・中川 正編『文化地理学入門』187-208, 東洋書林.
- 中崎隆生 (2016): 年番制度が守る祭りと煙火-駒ヶ根市大宮五十鈴神社の大三国-. 伊那民俗, **106**, 2-4.
- 早川孝太郎 (1930): 歌舞を基調とする祭り. 民俗藝術, **3**, 423-431.
- 藤田佳久 (2017): 三遠南信地域における中央構造線文化軸-豊かであった山間地域-. 和田明美編『道と越境の歴史文化-三遠南信クロスボーダーと東西文化-』143-169, 青簡舎.
- 宮田村誌編纂委員会 (1983): 宗教. 『宮田村誌下巻』545, 宮田村誌刊行会.
- 武藤輝彦 (2001): 『長野の花火は日本一』43, 信濃毎日新聞社.
- わたしたちのお宮大宮五十鈴神社編集委員会編 (1998): 『わたしたちのお宮大宮五十鈴神社-お宮のことがよくわかる』大宮五十鈴神社総代会.

### Contemporary Modification of Dedication Fireworks in Kami-ina Area, Nagano Prefecture

SAKAMOTO Yuki\*, WATANABE Junya\*\*, YAMASHITA Akio\*\*\*

\*Bunri University of Hospitality

\*\*Kyushu Economic Research Center

\*\*\*University of Tsukuba